

看護学教科書にみる研究倫理：倫理・行動規範の視点から

酒井田 由紀

Analysis of Research Ethics in Nursing Textbooks
— Focusing on Ethics and Code of Conduct —

Yuki SAKAIDA

要 旨

【目的】看護基礎教育で用いられる書籍から研究倫理教育に関する内容を分析し、看護学における将来の研究倫理教育のあり方を模索するための基礎的資料を得る。【方法】対象とした書籍は、章の構成、研究倫理に関する記述があるページ数、全ページ数に対する研究倫理に関する記述があるページの割合、記述内容で分類し情報を抽出した。【結果】関連書籍5シリーズの計12冊が抽出された。看護学概論の書籍では研究倫理は看護における倫理や臨床倫理の文脈で述べられており、看護研究および看護倫理の書籍は研究倫理を独立した章立てとしていた。記述の多い項目は被験者保護のための規制の正当性と歴史・被験者権利に関する内容であった。【結論】看護基礎教育における研究倫理教育は焦点化され教授されていた。看護学の書籍の中で研究倫理がどのように記述されているかについて整理したことは、看護臨床家・研究者にとって貴重な情報を提供できうると考える。

キーワード：研究倫理、看護教育、学士課程、看護学生

Keywords: research ethics, nursing education, bachelor's degree program, nursing student

I. 緒言

文部科学省による研究機関における研究倫理教育に関する調査・分析業務報告書（2015）では①研究倫理教育に携わる人材の育成と確保、②研究倫理教育として実施する内容・方法、評価の検討、③分野を越えた研究倫理教育の実施と調整が研究倫理教育の実施上の課題として示された。本邦において公表されている研究倫理教育プログラムには、東京大学医学部附属病院臨床研究支援センターから公表されている系統的臨床研究者・専門家の生涯教育・研修 Continuous Systematic Education & Training Curriculum for Clinical Researchers and Specialists

のためのシステム CREDITS（以下、CREDITS）や一般財団法人公正研究推進協会による APRIN eラーニングプログラム、ICR Web などがある。なかでも CREDITS は、開発機関のみならず大学病院臨床試験アライアンス、国立大学附属病院臨床研究推進会議などにより検討された教材であり国内に広く普及している。

一方、国内の看護学生への研究倫理教育に目を向けると保健師助産師看護師学校養成所指定規則のなかに専門分野として基礎看護学や看護の統合と実践があり、研究倫理教育の多くはこれに係る看護学概論や看護倫理、看護学研究等の科目で教授されている。これに加えて、国際

看護師協会から提言された看護研究のための倫理指針（ICN,2003）においても、研究は臨床看護師の責務であることが明言されている。しかしながら、このように近年、研究倫理への関心の高まりがある一方で、将来に研究活動を担うことが求められる看護学生に対する研究倫理教育を論じたものを見出すことは困難である。例えば、看護における研究倫理教育を紐解こうとすると、臨床看護師や看護管理者、看護学教員を対象にした研究倫理教育をテーマにした調査（有江ら，2017）や倫理審査を受審する看護学研究者を対象とした調査（大西ら，2020）などに留められ、いずれも、看護教育や看護研究を実践する専門職者に焦点を当てている。これらのことから、研究倫理教育の初学者である看護学生に対する、研究倫理を取り巻く歴史や研究倫理上の規範、データの取り扱いの厳格さ、研究倫理審査の必要性などの教授内容を概観して示された基礎的資料が不足している状況にある。

臨床研究の歴史と規制やインフォームド・コンセントと被験者の権利などは先に挙げた研究倫理教育プログラムでも研究倫理教育の基盤となるものとして位置づけられており、看護学の教科書では研究倫理の構成要素が記述されているのはどの科目で使用されているものであるか、及び研究倫理にどのくらい関心が示されているかを明らかにすることにより、研究倫理教育や指導方法の検討に向けた示唆を得ることができる。

本調査では、看護基礎教育で用いられる教科書を手掛かりに研究倫理教育に関する内容を分析し、看護学における将来の研究倫理教育のあり方を模索するための基礎的資料を得ることを目的として実施した。

II. 方法

1. 研究デザイン

看護基礎教育で使用される教科書シリーズの検討による実態調査型研究

2. 研究対象文献の選定要件およびデータ収集方法

研究対象文献は、シリーズにおいて看護学概論、看護研究、看護倫理学に関する書籍が各々独立して出版されていることを選定条件とし、体系的かつ網羅的に各看護領域の教科書を出版している出版社の専門基礎科目と専門科目の教科書シリーズ（別巻含む）の看護学概論、看護研究、看護倫理学で使用される看護基礎教育で汎用される各教科書を対象とした。

3. データ収集期間

2020年7月～9月

4. 調査方法

看護基礎教育で汎用される各教科書シリーズのなかから看護学概論、看護研究、看護倫理学で使用されるテキストを収集し、研究倫理に関する記述がある関連書籍を抽出した。なお、研究倫理を取り巻く背景や関連するガイドライン、国内法及び指針は目まぐるしく改訂されていることから、各教科書の最新版もこれらの状況を反映していないことが推察される。しかしながら、本調査では主にテキストをもとに教育されている現状を踏まえ、データ収集時点において、使用されているテキストを調査対象とした。

5. 分析方法

CREDITSのシラバスは倫理・行動規範に関する3項目（1.臨床研究の歴史と被験者保護・2.臨床研究における研究不正と行動規範・3.臨床研究実施で考慮すべき倫理関連事項）と臨床研究の実施に関する12項目で構成される。本研究で対象とした書籍から、目次より全章の章立てにおける研究倫理の位置づけを、本文より記述された情報を抽出した。抽出された情報は、CREDITSに示される『項目』及び『シラバス』と対応させ、これを研究倫理・行動規範と位置づけて分類し分析を行った。分析の過程において、テキストからの抽出と分類にずれが生じていないか、確認を繰り返し、分析内容の妥当性に努めた。

III. 倫理的配慮

本研究は公刊された書籍に基づく文献調査であり、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針の対象外である。検討にあたり引用・参照する文献は全て出典を明記し、文献内容抽出の際には、論旨及び文脈の意味を損なわないように倫理的配慮を行った。

IV. 結果

分析対象としたテキストは、計5社から出版されたものである。関連書籍5シリーズのうち、看護学概論、看護研究、看護倫理に関する計12件に研究倫理に関する記述が抽出された。そのうち看護学概論に関する書籍5件、看護研究に関する書籍4件、看護倫理に関する書籍3件の全117ページであった（表1）。総ページ数に対して研究倫理に関する内容が占める割合は0.4～8.5%（平均3.6%）であり、書籍のタイプ別では研究倫理に関する内容は看護倫理、看護研究、看護学概論の順で多く説明されていた。

1. 研究倫理に関する看護学テキストの構成

研究倫理に関する看護学テキストの構成について、目次を基に大項目・中項目・小項目に区分して示す（表2）。看護研究および看護倫理の書籍は研究倫理を独立した章立てとしていた。看護研究のテキスト4件は、研究における倫理的配慮を大項目として研究倫理の歴史や倫理的

原則、被験者の権利、研究不正などで構成し、看護倫理のテキストも同様に研究における倫理を大項目として研究倫理の歴史や研究における倫理的問題、研究対象者への倫理的配慮の要点などで構成していた。一方、看護学概論のテキスト5件では、看護研究における倫理を生命倫理や看護倫理、研究論の下位項目として位置づけ、研究倫理は看護における倫理や臨床倫理の文脈で述べられていた。

2. 臨床研究の歴史と被験者保護に関する記述

表3にCREDITSシラバスに基づく研究倫理に関する記述内容を示す。CREDITSにおいて臨床研究の歴史と被験者保護については「被験者保護のための規制の正当性と歴史」、「インフォームド・コンセント・被験者権利」、「臨床研究者の責任」で構成されている。「被験者保護のための規制の正当性と歴史」に関する内容として、ニュルンベルグ綱領は8件、ヘルシンキ宣言は9件で説明されており、ニュルンベルグ綱領は第二次世界大戦のナチス・ドイツによる医学実験に絡めて説明されていた。タスキギー梅毒研究も含めて述べられている文献は4件であるが、このうちの2件にはタスキギー梅毒研究を背景として1974年に国家研究法が制定され、IRB（Institutional Review Board）が設置された経緯が説明されていた。この他に臨床研究の歴史に関連して説明のあった項目は和

表1：分析対象とした教科書

タイトル ^{*1}	書誌情報	出版社	版	発行年	総頁数	頁数 ^{*2}	頁数(%) ^{*3}
A	スーヴェルヒロカワ 看護学概論－看護とは・看護学とは－	スーヴェルヒロカワ	5	2011	315	5	1.6
B	ナーシング・グラフィカ 基礎看護学(1)：看護学概論	メディカ出版	6	2017	302	2	0.7
C	新体系看護学全書 専門分野Ⅰ 基礎看護学 看護学概論	メヂカルフレンド社	4	2017	327	8	2.4
D	系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護学[1]看護学概論	医学書院	17	2020	398	2	0.5
E	看護学テキストNICE 看護学原論：看護の本質的理解と創造性を育むために	南江堂	3	2020	258	1	0.4
F	スーヴェルヒロカワ これからの看護研究－基礎と応用－	スーヴェルヒロカワ	3	2012	482	12	2.5
G	新体系看護学全書 別巻 看護管理・看護研究・看護制度	メヂカルフレンド社	5	2013	228	4	1.8
H	系統看護学講座 別巻 看護研究	医学書院	1	2016	378	23	6.1
I	ナーシング・グラフィカ 基礎看護学(4)：看護研究	メディカ出版	3	2018	142	12	8.5
J	スーヴェルヒロカワ 看護倫理学－看護実践における倫理的基盤－	スーヴェルヒロカワ	1	2010	310	20	6.5
K	看護学テキストNICE 看護倫理：よい看護・よい看護師への道しるべ	南江堂	2	2014	245	11	4.5
L	系統看護学講座 別巻 看護倫理	医学書院	2	2018	231	17	7.4

*1：番号A・B・C・D・Eは看護学概論のテキスト、番号F・G・H・Iは看護研究のテキスト、番号J・K・Lは看護倫理のテキスト

*2：研究倫理に関する記述があるページ数

*3：テキストの全ページ数に対する研究倫理に関する記述があるページの割合

表 2：研究倫理に関する看護学テキストの構成

タイトル ^{*1}	目次		
	大項目	中項目	小項目
A	X： 看護研究	3： 研究のプロセス	5) 看護研究における倫理的配慮
B	6： 看護における 倫理と価値	2： 看護における倫理の必要性	3. 看護研究における倫理
C	第 6 章： 看護における 倫理と法	III 臨床倫理	A. 倫理的関心が高まった背景 2. 医学研究における歴史
D	第 5 章： 看護における 倫理	C. 看護実践における倫理問題への取り組み	C④倫理的課題に取り組むためのしくみ ②看護研究における倫理と研究倫理委員会
E	第Ⅷ章： 看護・看護学 の 展望	2. 看護実践と研究	B. 看護研究 4. 研究における倫理的配慮
F	第 3 章： 看護研究に おける 倫理	1. 科学研究の自由と規制 2. 看護研究における倫理 3. 看護研究における不正 4. 知的財産の保護と利益相反 5. 研究対象者の権利保護 6. 研究倫理審査委員会への申請 7. 対象者への研究成果のフィードバック 8. 研究成果を公表する前の最終チェック	
G	第 2 章： 看護における 研究	V： 看護研究における課題	A. 看護研究と患者の QOL B. 臨床研究と看護の倫理
H	第 4 章： 研究における 倫理的配慮	A：研究における倫理的配慮の原則 B：依頼書と同意書の書き方 C：特別な配慮が必要な場合の対応 D：依頼書、同意書の例	A①研究倫理の歴史 A②遵守すべき倫理原則と養護すべき権利 A③研究倫理に関するガイドライン B①依頼書の書き方 B②同意のとり方 C①自己判断がむずかしい対象者 C②強制力を排除するための配慮
I	7： 研究における 倫理	1. 倫理とは何か 2. 看護研究における倫理ガイドラインの開発 3. 研究において擁護されるべき権利 4. 動物実験についての倫理的配慮 5. 看護研究における倫理を促進するために	1. 研究における倫理 2. 研究における倫理的な配慮が求められてきた歴史的背景 3. 人間を対象とする研究において守らなければならない三原則 1. 五つの権利 2. 人権擁護の方法 3. 研究機関、医療機関における研究倫理審査委員会 4. 研究において特別な配慮が必要な対象者 5. 研究のリスクと利益の考え方 6. 研究活動や看護実践における倫理に反する行為の例
J	第 9 章： 看護倫理と 看護研究	1. 看護研究における倫理的配慮とは 2. 調査、面接、実験などの研究方法における倫理的配慮 3. 看護研究における倫理指針 4. 臨床研究に関する倫理指針 5. 倫理審査委員会 6. 研究プロセスに沿った具体的な倫理的配慮 7. 研究者のミスマンダクトとモラル 8. 研究と倫理的配慮における課題	
K	第Ⅶ章： 看護研究に おける倫理	A：看護と研究 B：研究参加者保護に関する歴史的事項 C：看護研究に関わる研究倫理指針 D：看護研究における倫理的配慮	B1. ニュルンベルグ綱領 B2. ヘルシンキ宣言 B3. タスキギー梅毒研究 B4. ペルメント報告 D1. 研究の手続きにかかわる倫理的配慮 D2. 研究の公表にかかわる倫理的配慮
L	第 9 章： 看護研究の 倫理	A：看護職と研究倫理 B：研究における倫理的問題 C：倫理的配慮の要点 D：看護研究に必要な倫理的配慮	C①法律・指針、倫理審査 法律、指針 倫理審査 C②倫理的配慮の要点 D①参照すべき指針など D②倫理的配慮の要点

*1：タイトルと書誌情報は表 1 と同一

田移植に関する説明の1件のみであった。ヒトを対象とする研究倫理原則「人格の尊重 (respect for persons)」「善行 (beneficence)」「公正・正義 (justice)」が述べられていたのは7件であった。

「インフォームド・コンセントと被験者権利」に関する記述内容として、インフォームド・コンセントの定義や必要性については10件のテキストに記述されていた。これに関連してインフォームド・アセントに関して記述されているテキストが4件、オプトアウトに関して記述されているテキストが1件であった。研究における研究対象者の権利について記述されているのは5件であり、不利益を受けない権利、情報公開の権利、自己決定の権利、プライバシー・匿名性・機密性保持の権利の4つで構成されると説明するもの(テキストJ)、不利益を受けない

権利と利益を得る権利およびプライバシーの権利と匿名の権利を区別して説明するもの(テキストH)、プライバシーと尊厳に関する権利と匿名性と守秘性に関する権利を区別して説明するもの(テキストI)があった。

「臨床研究者の責任」に関する内容として特別な配慮を要する研究対象者、治療を十分に受けられる保証をすること、個人情報の取扱い、リスク・ベネフィットの検討に関する記述を抽出した。社会的弱者のように特別な配慮を要する研究対象者については7件で説明されており、看護研究で想定される研究者から研究対象者へのポジション・パワーの影響も含めて記述されているものが6件であった。研究における個人情報の取り扱いについては看護研究のテキスト4件と看護倫理のテキスト2件に記述されてい

表3：CREDIT シラバスに基づく研究倫理に関する記述内容

対象としたテキスト*1												
CREDIT シラバス	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1. 臨床研究の歴史と被験者保護												
被験者保護のための規制の正当性と歴史	*	*	*	—	—	—	*	*	*	*	*	*
インフォームド・コンセント・被験者権利	*	*	*	—	*	*	—	*	*	*	*	*
臨床研究者の責任	*	*	—	*	*	*	*	*	*	*	*	*
2. 臨床研究における研究不正と行動規範												
メンタリング	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不正と過失	*	—	—	—	—	*	—	*	—	*	*	*
科学研究行動規範	—	—	—	—	—	*	—	*	—	—	—	—
利益相反	—	—	—	—	*	—	—	*	—	—	*	*
オーサーシップ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	*	*
共同研究	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
公的研究資金	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
3. 臨床研究実施で考慮すべき倫理関連事項												
倫理審査委員会/IRB	*	*	—	*	*	*	*	*	*	*	*	*
ピアレビュー	—	—	—	—	—	*	—	—	—	*	—	—
プラセボ投与 (試験デザイン)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*	—
データベース登録	—	—	—	—	—	*	—	—	—	*	*	*

1：番号A・B・C・D・Eは看護学概論のテキスト、番号F・G・H・Iは看護研究のテキスト
番号J・K・Lは看護倫理のテキスト

：該当する記述あり、—：該当する記述なし

た。リスク・ベネフィットの検討については侵襲・リスクの定義や検討を行うことの意義が4件で説明されていた。リスク・ベネフィットに関する記述は看護学概論のテキストには記述が見当たらなかった。看護研究のテキストでは、人を対象とする研究のリスクとして「人を対象とした研究は、多かれ少なかれ、対象者に不利益を与えるリスクを有している」とし介入を伴わない研究であってもリスクが生じる可能性を明示しているものがあった(テキストH)。

3. 臨床研究における研究不正と行動規範に関する記述

次に臨床研究における研究不正と行動規範に関する記述を抽出した。CREDITSにおいて本章は「メンタリング」、「不正と過失」、「科学研究行動規範」、「利益相反」、「オーサiership」、「共同研究」、「公的研究資金」で構成されている。「不正と過失」の内容として不正と過失の定義、科学者の不正行為である捏造 (fabrication)、改竄 (falsification)、盗用・剽窃 (plagiarism) のFFP、データの扱い方に関する記述を抽出した。不正と過失の定義の記述があったテキストは2件、FFPの3つを具体的に述べているものは4件であり看護研究2件と看護倫理の2件のテキストに記述されていた。データの扱いは3件のテキストに記述されていた。「科学研究行動規範」の内容として科学者の行動規範(日本学術会議, 2013)と過去に行われてしまった捏造・改ざん・盗用事件に関する記述を抽出した。科学者の行動規範は看護研究のテキスト1件に、捏造・改ざん・盗用事件も看護研究のテキスト1件に記述があった。「利益相反」については4件のテキストに記述があった。「オーサiership」については看護倫理のテキスト3件に記述があり、不適切なオーサiershipの例について述べたものやAPAによる判断基準を引用し、実際に執筆したかどうか、と実質的な学術的貢献を果たしたかどうかを著者資格の有無の判断であると示したテキストがあった。この他の項

目である「メンタリング」、「共同研究」、「公的研究資金」について記述されているテキストは見当たらなかった。

4. 臨床研究実施で考慮すべき倫理関連事項に関する記述

次に臨床研究における臨床研究実施で考慮すべき倫理関連事項に関する記述を抽出した。CREDITSにおいて本章は「倫理審査委員会／IRB」、「ピアレビュー」、「プラセボ投与(試験デザイン)」、「データベース登録」で構成されている。「倫理審査委員会／IRB」の内容として

IRBの目的・役割・責務とIRB申請のためのタイムラインと主要な書類に関する記述を抽出した。IRBの目的・役割・責務は11件のテキストで説明されていたが、申請のためのタイムラインと主要な書類まで述べたテキストは2件のみであった。またIRBの役割についてはその役割を、研究の計画段階からの審査を通じて、研究実施の段階で対象者の権利を損なうことがないように、倫理的問題を未然に防止すること(テキストD)、研究参加者の保護を目的とし、インフォームド・コンセントの徹底や、研究参加者と社会へのリスクとベネフィットの評価などが含まれる(テキストK)、などと説明があった。加えて看護研究のテキストでは、研究計画の倫理的妥当性と科学的合理性を審査している(テキストH)と前述の説明から一步、踏み込み研究倫理の主幹を言及した記述がなされている。

「ピアレビュー」に関する記述があったのは2件であり、1960年代に研究者や医師により“Peer Review”方式で委員会審査がおこなわれたこと(テキストF)や研究の価値(意義)や科学研究としての論理的整合性、利益と害(リスク)などについて、まずは同僚(ピア)に意見を求める(テキストF)と説明されている。

「プラセボ投与(試験デザイン)」については看護倫理のテキスト1件で説明されており、このデザインが持つ倫理的問題について言及されている。

「データベース登録」の内容として公開されたデータベースへの登録と結果の公表に関する記述を抽出した。結果の公表に関する記述は4件に認められたもののデータベース登録に関する記述はどのテキストから見当たらなかった。

V. 考察

1. 看護学教育における研究倫理の位置づけ

研究倫理に関する看護学テキストの構成に関する調査結果で示したように、看護研究と看護倫理のテキストでは研究倫理を独立した章立てとし、歴史的背景や倫理原則を説明するものが多くを占める一方で、看護学概論のテキストでは生命倫理と看護倫理の一つの側面として研究倫理を位置づけていた。看護学概論は看護基礎教育において1年次生で最初に受講する看護系科目であり、看護学を概観する授業内容が求められるため、授業内容が多岐にわたる(滝島, 2020)。当該科目で教授すべき項目は膨大でありそのためにこのような構成としていることが考えられる。

しかしながら、看護学教育における研究倫理の位置づけについては議論の余地がある。職能団体による指針では、研究は臨床看護師の責務であると明言され(ICN, 2003)、臨床研究の実践者として看護研究を行うことが挙げられている。加えて、臨床家である看護師は医学系研究の計画と実践に多くの貢献があり(Yanagawa et al., 2014)、他専門職から期待されている。看護実践者や看護教育・研究者を育成する基礎教育において医療専門職として研究を推進することや研究倫理を学ぶ意義や目的を明確にし、学年や学修段階に応じて構造化した研究倫理教育を行うことは、将来的に看護学のみならず医学系研究の発展に多くの寄与が期待できる可能性がある。

2. 看護学教育における研究倫理・行動規範の教授内容

人を対象とする臨床研究の研究対象者を権利

と福利への侵害から保護するために、2つの仕組みが存在する。その1つが独立した研究倫理審査委員会による研究計画の事前倫理審査であり、もう1つが被験者それぞれから自発的インフォームド・コンセントを得る適切な手順である(G.Post, 2006)。本調査で対象にしたテキスト12件中11件に研究倫理審査委員会に関する記述があり、客観的第三者が倫理的・科学的観点による審査を経たうえでの研究の開始や継続の可否を判断することの必要性が述べられていた。一方でピア・レビューが要請される経緯に言及している文献は限定的であった。研究倫理審査委員会の成り立ちを考えると、医学研究の歴史やピア・レビューへの言及を経ずに研究倫理審査の説明に至ることは倫理審査が形式的・手続き的と解釈される可能性がある。同様に、対象にしたテキスト12件中10件に記述のあった項目はインフォームド・コンセントについてであった。1979年に発出されたベルмонт・レポートによると、研究倫理原則のひとつである「人格の尊重」には個々を自律的(autonomous)な主体として扱うこと、自律性の低下した人格は保護されなければならないとする2つの倫理的意味がある。研究倫理の根幹である研究対象者への十分な説明と納得のうえでの同意は臨床倫理でも重要とされているものの、研究倫理におけるインフォームド・コンセントの概念は臨床倫理と同義ではないという考え方もある(Miller et al., 2006)。パターンリズムの影響を受ける可能性のある臨床研究の実施においてインフォームド・コンセントの項目は第一義として教授すべき内容であろう。

さらには看護研究と看護倫理のテキストには「不正と過失」に関する記述が認められた。過去に行われた研究不正問題に対応すべく「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」には研究不正行為に対して厳しく対応するという基本姿勢とともに研究者、科学コミュニティ等の自律・自己規律を促し、大学等の研究機関の管理責任の明確化が提言されてい

る。加えて、その防止のために研究倫理教育の確実な実施、不正事案の一覧化公開の実施、対象とする不正行為の提示とその行為に対する処置にも触れている（向，2017）。この項目が多くテキストに記述されている背景には、近年、責任ある研究活動（Responsible Conduct of Research）の実践が研究者にとって喫緊の課題であり、研究倫理教育における優先項目と捉えられているからであろう。これに関連して大学院博士課程の学生を対象にした研究不正に関する教育を論じたものに松澤からの報告（2017）があり、コンプライアンス教育として基本的知識を学ぶだけでは十分とはいえず、非意図的に発生する研究不正のリスクの存在を認識し、「適切な行動を選択する能力」を学ぶための継続的・反復的トレーニングが必要であることが提言されている。研究者育成のための大学院課程と学士課程を一概に比較できるものではないものの、看護研究者としての初歩段階の学士課程においても、研究公正の定義を除いて説明することは研究者倫理の基盤となる知識を教授できないことになりかねない。しかしこの調査の結果では科学研究行動規範や過去の国内外の捏造・改ざん・盗用事件についてどのテキストでもほとんど説明されていなかった。研究の透明性の確保についても教示されていないことは、今後の教育内容の検討課題であると考えられる。

今回の対象にしたテキストではメンタリングや共同研究、公的研究資金やデータベース登録に関する項目は認められなかった。これらは主に研究者へ教授すべき内容である意味が強く、看護基礎教育との関連は少ないと捉えられていることも一因であることが考えられる。また、オーサーシップに言及しているテキストは限定的であり、その内容も各々の用語の定義に留めている。医学系の研究倫理教育においてこれらの内容は比較的、近年に教育されてきた背景から研究論以外のテキストには記述がなされなかった可能性がある。このことは今後、臨床研究を取り巻く情勢や社会的要請によってはこれ

らの内容を加えることの検討が必要であることが示唆された。これらの結果が示されたことは基礎教育における限られた時間での研究倫理教育の指導方法の構造化については検討の必要がある。

VI. 結論

看護基礎教育で用いられる書籍から研究倫理教育に関する内容を分析した結果、看護学概論、看護研究、看護倫理に関する計12件に研究倫理に関する記述が抽出された。記載内容で最も多かったものはインフォームド・コンセントや研究倫理審査委員会であり、記述のなかった項目はメンタリングや共同研究、公的研究資金やデータベース登録についてであった。

研究倫理の概念は看護教育の教科書ではほとんど注目されておらず、なかには臨床看護倫理と研究倫理を包含して述べているテキストもある。よって倫理教育によせる教育時間は限られているのが現状である。研究倫理を学ぶ意義や動機付けが曖昧になることがないように、基礎教育を教授される看護学生が研究倫理を学ぶ意義や目的を明確にすることが必要である。

研究倫理教育では倫理・行動規範の他に臨床研究の実施に関する内容で構成される。本論文では看護基礎教育における教授内容を概観するために倫理・行動規範の教授内容に着目したが、実施に関する項目でも教育内容の分析を行い、研究倫理教育の指導方法の構造化の検討に寄与することが求められる。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

付記

本論文の内容の一部は日本看護学教育学会学術集会第29回学術集会で発表した。

引用文献

文部科学省科学技術・学術政策局（2015）：研究

- 機関における研究倫理教育に関する調査・分析業務報告書, 1-109.
- 東京大学医学部附属病院臨床研究支援センター (2020年11月12日). 系統的臨床研究者・専門家の生涯教育・研修 Continuous Systematic Education & Training Curriculum for Clinical Researchers and Specialists のためのシステム. <https://www.uhcta.com/uth/member/>
- 一般財団法人公正研究推進協会 (APRIN, Association for the Promotion of Research Integrity) (2020年11月12日). APRIN eラーニングプログラム. <http://aprin.or.jp/>
- 有江文栄, 桂川純子, 佐伯恭子, 大西香代子 (2017): 看護研究倫理の課題: 研究倫理教育に焦点を当てて, 日本看護倫理学会誌, 9(1), 45-52.
- 大西香代子, 箕輪千佳, 有江文栄. (2020): 倫理審査を受けた看護学研究者の倫理審査委員会とその審査に対する思い, 日本看護倫理学会誌, 19016.
- The National Commission for the Protection of Human Subjects of Biomedical and Behavioral Research. (2020年11月12日). The Belmont Report ethical principles and guidelines for the protection of human subjects of research. <https://www.hhs.gov/ohrp/regulations-and-policy/belmont-report/index.html>,
- 日本学術会議 (2020年11月12日). 科学者の行動規範－改訂版－. <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-22-s168-1.pdf>
- 滝島紀子 (2020): 看護基礎教育における「看護学概論」「看護学原論」の授業内容の実態, 川崎市立看護短期大学紀要, 25(1), 27-36.
- ICN (2020年11月12日). 看護研究のための倫理指針. <https://www.nurse.or.jp/nursing/international/icn/document/pdf/guiding.pdf>
- Yanagawa, H., Takai, S., Yoshimaru, M., Miyamoto, T., Katashima, R., & Kida, K. (2014): Nurse awareness of clinical research: a survey in a Japanese University Hospital, BMC medical research methodology, 14(1), 85.
- Stephen G. Post編. (2006): 生命倫理百科事典, 908, 丸善, 東京.
- Miller, F. G., & Joffe, S. (2006). Evaluating the therapeutic misconception. Kennedy Institute of Ethics Journal, 16(4), 353-366.
- 文部科学省 (2020年11月12日). 研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン. www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/_icsFiles/afieldfile/2014/08/26/1351568_02_1.pdf
- 向平和 (2017): 研究倫理・生命倫理に関する教材開発に向けた基礎的研究, 日本科学教育学会年会論文集, 41, 401-402
- 松澤孝明 (2017): 博士人材の研究公正力 (1): グローバル化時代の研究倫理教育, 情報管理, 60(6), 379-390